

カトリック河原町教会だより

2015年11月

神と人々を愛した ヨゼフ・マリア 村上眞理雄神父を偲んで



2015年9月4日、わたしたちが敬愛する村上眞理雄神父が、享年86歳で帰天されました。7日の通夜と8日の葬儀ミサには、聖堂に入りきれない人々がヴィリオンホールまであふれ、一同で永遠の安息を祈りました。

眞理雄神父はいつも温かい微笑みをもってわたしたちに接して下さり、ミサの説教は優しさに溢れ、常に信仰による励ましをくださいました。最後まで主の僕として働き、その生涯を神と人々に捧げられた眞理雄神父に、深い敬愛と心からの感謝をもって哀悼の意を表します。

[左写真提供: 京都教区広報委員会]

眞理雄に代わって～透磨から

10月9日の朝6時半、「トントン」とドアをたたく音。兄がミサに誘いに来たかと思いました。でも「あれ、変だぞ。もういないはず。もしや？」そう、朝のミサ当番の呼び出しだったのです。急いで下へ降りていき、遅れたことを詫びながら……。兄と隣り合わせの部屋に住むようになって、朝6時半になると、いつもドアをたたく音がして、よく一緒にミサをしました。最後の1週間になって、呼び出しがなく、こちらから誘いに……。入院3日前にも一緒に司式し、最後は「今日はしない」と申しました。ずいぶんしんどかったのでしょうか。兄は時間に厳しく、例えば、修道院のミサに10分前に着いても、近くの広場で待機し、定刻に玄関のベルを鳴らすような人でした。日曜日のミサに呼ばれた時も、あまりにも早くでかけるので、「兄ちゃん、今行っても誰も来てへんで。戸も閉まってるし」と言っても、早めに出かけ、車で時間調整をすると言うのです。

病院に入院して2日目にはほとんど話せない状態なのに、何か言いながら「うふふ」と笑い、「あの時、失敗したな、面白かったな」みたいなことを言っているのです。それは、以前入院していた時に、点滴をずっとしていた兄が、ある日行ってみると、点滴をはずして「靴がない、ズボンがない」と言って捜しているのです。「兄ちゃん、何してんの」「ミサに行かんならん」「今日、何曜日と思ってんの、日曜ちゃうで。寝とかんとあかんやんか」と笑ったことがありました。どうもそれを思い出していたようです。



南部地区協力司祭 村上 透磨 神父

これは、最後までユーモアを絶やさない、そこに居合わせた人を愉かにさせたいとの心から出たことだと思います。兄はいつもパイプをくわえ、何もせず頼りないように見えたかもしれませんが、その時じっと考えていたのです。人のことを。きっとそれは、古屋司教様の時代から、総代理の重責を長く続けさせていただけた理由であったかもしれません。

さて、兄に代わって、ここで皆さんに心からの感謝を伝えさせていただきます。ありがとうございました。それから「ごめんね」も一言。

わたしが5歳の時、兄が神学校に入り、それからずっと兄の後を追いつけましたが、とうとう追いつけませんでした。わたしが司祭を志したのも、兄という「先達・模範・目標」があり、それに両親の願いと祈り、兄弟姉妹や皆さんの支えがあったおかげです。両親は、長男はぜひ神様におさげしたいと願っておりましたが、立派に親孝行してくれました。10月18日はテレジアの両親・マルタン夫妻の列聖式です。兄を愛して下さった皆さんとご家族も、神様の祝福をいただけたらと願います。また、10月19日はパウロ6世の列福記念日です。天国はにぎやかになります。いつかわたしたちもその端っこに……皆さんは真ん中に。

あいにあふれた

りそうの楽園

がん前に輝くのを

ともに見る

うれしさ

(透磨)

